

平成30年度第2回知床世界自然遺産地域科学委員会
適正利用・エコツーリズムワーキンググループ
議事録

日時：平成31年2月28日（木）10：00～12：00

場所：中標津総合文化会館【しるべつと】 コミュニティホール

会 議 次 第

開会

あいさつ

議事

1. 長期モニタリング計画の見直しと科学委員会への提案について
2. 適正利用・エコツーリズム検討会議部会への委員参加について
3. その他
 - (1) 知床国立公園利用のあり方に関する懇談会について
 - (2) 適正利用・エコツーリズムワーキンググループ 設置要綱の改定について

閉会

事務局 環境省 高辻

ただいまより平成30年度第2回知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズムワーキンググループを始める。

環境省釧路自然環境事務所の高辻と申します。よろしく申し上げます。

開会に当たり釧路自然環境事務所所長安田よりご挨拶申し上げます。

事務局 環境省 安田所長

皆さんおはようございます。年度末のお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。本日は午前、午後と長時間の会議になる。どうぞよろしく申し上げます。

本日のエコツーリズムWGでは、来週の科学委員会に向けた長期モニタリングの見直しについて取りまとめをお願いしたい。その他様々な課題についても活発な議論をお願いした

い。

事務局 環境省 高辻

本日の委員出席状況を報告する。石川委員、庄子委員は欠席、小林委員が1時間ほど遅れて到着される予定である。

【配布資料確認】

本日の会議は公開で行う。承知いただきたい。以降の進行は敷田座長にお願いする。

敷田座長

おはようございます。

エコツーリズム WG 会議をスタートする。今年度より5年ぶりに復活したエコツーリズム WG である。エコツーリズム検討会議では非常に重い議論を繰り返しており、時間的制約もあることから十分な専門的議論ができない。そのためエコツーリズム WG の復活で補って行くという趣旨で再スタートしている。

再スタートに当たり、環境省、林野庁に努力をいただき、昨年度から北海道にも積極的に参加いただいている。丁度良いタイミングで再開できた。午後の会議もあるため12時終了を目指して会議を運営したい。協力をお願いする。

私がエコツーリズム WG の司会をするのは要綱で決まっているため納得してほしい。午後の会議の司会も私がするが、午前の会議は関係者、専門家、仕事上の専門分野を持つ専門家の中で自由に議論したい。

会議というより懇談、意見交換の部分が入れれば良い。ここで交わされた専門的見地からの議論が午後からの会議の中で反映される。「専門的見地からはこうだが現実はこちら。」というような調整が進んで行けば良い。午前中は「原則はこうである。」という事に固執していただいても構わない。午後からの検討会議は、会議の関係者と協議をするための条件を最終的に調整していくのが役目である。午前と午後の役割の違いを考えて参加してほしい。

小林委員が約1時間後に到着する。小林委員が提示された課題の議論は後半に入るため大きな支障はない。到着次第参加ということで順次進めていきたい。

本日の大きな議事は3項目ある。1番目は長期モニタリング。2番目は部会への委員参加について。小林委員の到着時間によっては、3番目のその他を先に進めながら2番目の議題に戻したい。

1番目の議事、長期モニタリングについて事務局より説明後に議論を行いたい。長期モニタリングについては愛甲委員に尽力いただいているため、愛甲委員が中心となって議論をしていただきたい。

【議事1. 長期モニタリング計画の見直しと科学委員会への提案について】

事務局 環境省 守

長期モニタリング評価指標及び評価基準等の見直しについて説明（資料 1-1）

適正利用・エコツーリズム WG 担当 新評価シート（案）について説明（資料 1-2）

長期モニタリング評価指標及び評価基準等の見直しについての意見整理表について説明（資料 1-3）

敷田座長

長期モニタリングは毎回会議のテーマにしているが、何度も議論をされているため皆さんも細かい内容を忘れがちになると思う。今回の一連の改定の流れは、愛甲委員と私より昨年度の科学委員会でのエコツーリズム WG・エコツーリズム検討会議関連のモニタリング項目に関する大改定の提案から始まっている。（参考資料 4）これはその際、仮承認されたため、それに従い今回の変更を行っている。

これまで利用のみを調査モニタリングの対象にしてきたが、新たに管理についても対象とするということが大きな違いである。資料 1-1 の裏面にある No.19-a、No.19-b が新しい管理に関する項目である。No.19-c は従来からある利用実態調査である。No.19-a と No.19-b が新しく入った項目であることを共有してほしい。No.19-c に関しては従来のやり方を継続する。そのため今回は No.19-a、No.19-b について重点的に議論したい。

参考資料 4 にある「影響」については、担当する各 WG が自然環境についてのモニタリングを担当している。利用の結果、影響が発生する対象である環境について、それぞれモニタリングを行っている。前回の議事録を確認いただいていると思うが、「社会」へのモニタリングをどうするのかという小林委員からの発言があった。最終的な決着は科学委員会に判断してもらうということであった。基本的には海域 WG で見ているため、海域 WG か科学委員会全体で判断してもらうということになる。そのため、今回はエコツーリズム WG では対象にしないという整理にしていた。この件について修正はあるか。

事務局 環境省 守

「社会」については海域 WG でも議論があり、科学委員会本会での整理が妥当だという話になっている。

敷田座長

私個人も、環境への影響というのはアメニティも含んだ社会に対する影響も発生すると考えている。モニタリングしても良いとは思いますが、項目が非常に多く複雑であるため、それ自体で 1 度議論が必要になる。エコツーリズム WG では環境への影響という整理をした上で、「社会」という項目の人口や経済というようなことを整理すれば良いと考えている。愛甲委員、この「社会」に関して、その整理で良いか。

愛甲委員

はい。

敷田座長

大枠の整理は終わったが、軽微であれば内容の修正はできるか。

事務局 環境省 守

資料自体の印刷は終わっている。

敷田座長

口頭修正はできるか。

事務局 環境省 守

口頭修正はできる。

敷田座長

遠慮なく意見を言ってもらいたい。この場で決着が付かなかった場合は、科学委員会に説明、重大な問題であれば継続審議になる可能性もある。いつまでに決める必要があったか。

事務局 環境省 守

次回の科学委員会で一度決定する。

敷田座長

一度決めなければいけないため議論をお願いする。

斜里町 増田

資料 1-2、6 ページについて 2 点質問がある。1 点目、知床五湖冬期利用はここでは取り上げないということである。現時点での影響のあり、なしは別として、斜里町で右肩上がりに利用が伸びているのは冬期利用ということもあり、モニタリングの対象にするべきだと思う。利用者数は外国人の比率等も含めて出ている。

2 点目はサケマス釣り利用者数に関することである。数字として現在把握できるのは、斜里町側ではライセンス、羅臼側では瀬渡しの部分である。

現実の問題となっているのは、利用者数の把握できない釣り人の増加である。これはこちらでも把握できていないが、見た目からも明らかに増えている。どのように把握していくかは一つの課題である。

敷田座長

増田氏より2点の提示があった。1点目は知床五湖冬期利用を取り上げるべきだということ。これはYES、NOで答えが出せる。また、サケマス釣りのデータ収集には知恵が必要である。どなたか意見はあるか。

事務局 環境省 守

説明不足で申し訳ない。知床五湖冬期利用については、斜里町観光協会が主催するツアーとしての利用であり、部会での報告があるため長期モニタリングには入れなくて良いのではないかという整理であった。しかし、入れたほうが良いということであれば入れても構わない。

敷田座長

現在、知床五湖冬期利用は明らかに増加の傾向が認められる。羅臼側でいえば観光船の利用に匹敵する。例えば、利用が落ち着き問題無いと判断した時点で除外することもできる。愛甲委員はどうか。

愛甲委員

はい。

敷田座長

基本的に影響が無いことは私も皆さんも共通認識をしている。増田氏それで良いか。

斜里町 増田

はい。

敷田座長

知床五湖冬期利用はNo.19-c 評価シートの項目に入れる。コメント欄も修正して最終版とする。サケマス釣りについてはどうしたら良いか。

斜里町 増田

難しく把握できない。

愛甲委員

今すぐどうしたら良いかは非常に難しく妙案も思いつかない。

それぞれのモニタリングには実際には様々な問題がある。カウンターや知床五湖全体の利用者数などである。例えば、駐車場の車台数等、実際にお金を取って計っているもの以外は様々な状況の変化があり、モニタリング方法に全く問題が無い訳ではない。注釈にはつき

り記載しておくことが大切である。

6 ページの評価シートでは項目が多くなり過ぎると別紙となってしまう。これまでの結果の取りまとめ方法や調査データの注釈等が抜けてしまうため注意が必要である。例えば、バス利用券の販売数に基づく等、データの諸元がこれまでは書かれていた。モニタリング項目について、「こういう注意が必要だ。」、「方法の改善が将来的には必要だ。」というような手法上の問題点を含めて書く欄を下部に作っておいても良いかと思う。

敷田座長

今のサケマス釣り利用者だけではなく全体に注釈を付けた方が良いということ。私も賛成だが紙面の関係ではどうか。現状の長期モニタリング結果は知床白書での注釈がそのまままっついていてと思う。事務量もそれほど増えないと思うがどうか。

事務局 環境省 守

毎年、国立公園利用者数の報告でも注釈は載せている。詳しく書くことは問題ない。例えば、評価シートを横向きとし、1 ページにまとめずに備考欄を設けることは可能である。

斜里町 増田

定量的な数をなかなか把握できないというのは我々の課題である。サケマス釣り利用者の増加には、一つに社会状況の変化があると思う。昨シーズンに利用者が増加した理由は、これまで釣りが認められていた他町、小清水町の止別川や網走湖防波堤などで釣りが禁止されたことが考えられる。そういうことが影響しているのではないか。標津町の植別川でも影響があると聞いた。北海道の漁業調整委員会の結果だと思う。それを書くかどうかは別として、例えば周辺地域の規制変化の情報も変化の参考にはなるかもしれない。

敷田座長

データの信憑性という問題ではなく、毎年の変化の注釈が必要ではないかということである。将来、最終的にこのデータをどう利用するかによるが、注釈と数字と一緒に並ぶデータは管理がしにくい。注釈は「集計についての注釈」と「実際に起きたことについての注釈」の2つとする。急激な増加は制度の変化によるもので実状ではないというコメントが入るということで良いか。

斜里町 増田

実状では増えているという結果が出ていると思う。

敷田座長

今の発言は例である。

斜里町 増田

はい。

敷田座長

注釈が2種類できるということである。

愛甲委員

先程の私の発言は、モニタリング集計根拠や問題点、課題等を書いておく注釈ということ。増田氏のいう注釈は利用者数の変化の評価に関わる話である。周辺の状況の変化による利用者数の増加は、もぐら叩きのような現象で知床内のデータ間でも起きるはずである。今年閉鎖されていた期間が長かった場所があった場合、違う場所で増えるということは当然起きる話である。そのため、評価の部分に書かれるべきである。

敷田座長

愛甲委員の説明が妥当だと思う。安田所長、評価の文章は長くなっても構わないか。

事務局 環境省 安田所長

はい。

敷田座長

評価の欄には、評価本来の大きな流れを書くため、こういう変化についてはこういう理由があるということを付記する形式を取りたいがどうか。

事務局 環境省 守

利用者数の変化は評価基準を設けずに評価しないことになっているが、こういう理由がありそうだと評価の欄に書いていただくことは構わない。

参考資料3に昨年度まとめた長期モニタリングの中間総括評価案がある。4ページ以降は知床五湖全体利用者数や駐車場利用者数、シャトルバス利用者数等のデータである。これまでとほぼ同じく評価シートの後ろにデータを付けていく。

例えば9ページでは、計算方法を注釈で載せて、10ページの高架木道ではカウンターの数値に捕捉率をかけて計算したということ載せている。これを全て評価シートに書くと膨大な量になるため書き方を相談したい。評価シートは評価シートでまとめ、中間総括評価シートのように後ろにデータを付ける。そこにデータの取りまとめ方法を付けるのか、もしくはデータの取りまとめ方法は評価シートにまとめて付けるか。

愛甲委員

私は 9 ページに載っているデータに興味があるが、科学委員会の委員は興味が無いはずである。エコツーリズム WG や適正利用エコツーリズム検討会議の中ではバックデータとして共有した方が良いが、このデータは知床白書に載るため科学委員会に見せる必要は無いと思う。

資料 1-2、6 ページの評価シート程度の情報で、どれが増えてどれが減ったかさえ分かっているだけで良いのではないか。調査方法が途中でどう変わったか、どういう調査を行っているかはエコツーリズム WG やエコツーリズム検討会議で議論すれば良い。

敷田座長

私も今の整理で良いと思う。これは長期モニタリングであり、長期の大きい傾向を見ることが基本である。単年度の変更については、こういう場で共有されて記録に残る。そして知床白書として記録に残れば良いと考える。使い分けて良いのではないか。むしろ、こちらのエコツーリズム WG に関連するデータとして長期的に注目しなければいけない項目を集中して説明できれば科学委員会での共有もしやすい。安田所長、山本氏はどうか。

事務局 環境省 安田所長、山本

はい。

中川委員

ダイナビジョンの利用者数を除外することについてである。ダイナビジョンは単に観光利用だけでなく、利用調整機能を果たし様々な自然に与えるインパクトを減らす役割を果たしている。そういう意味でダイナビジョンを除外して欲しくない。

知床自然センター建設当時、周辺には何も施設が無く、利用者がストレートに知床五湖やカムイワッカ、特に知床峠に入っていくことでオーバーユースになり混乱していた。そのため調整機能を交差点に置く目的で知床自然センターを作った。

ダイナビジョンは映像展示をすることで人を滞留させるという目的がひとつある。また、奥知床を映像で見せることにより、奥へ奥へと踏み込んで行くということを調整する。映像で楽しんでもらうことにより奥知床を守るというコンセプトで始まったものである。遺産センターやビジターセンター等の施設ができたため、かつてほどの役割は無いかもしれないが調整機能は果たしていると思う。

また、各施設の利用状況について、利用者数と平均滞留時間を掛けて延べの時間数のデータを取ることも指標になるのではないかと思う。滞留することにより調整機能だけでなく、様々な情報を得る、満足度を高めるということもある。トータルで自然やエコツーを楽しむ価値の向上になっており、自然に与えるインパクトを下げるという意味でも非常に価値があると思う。評価する大事な部分だと思う。

敷田座長

中川委員よりダイナビジョン等の施設利用についても項目として必要だという意見があった。関連して意見やコメントはあるか。

中川委員の意見は重要なことだと思う。しかし、ダイナビジョンの利用というのは施設利用であり正確にいうと資源利用ではない。

また、性質的にはダイナビジョンを見てもらうことで入域前に様々な学習をしてもらえることから、むしろNo.19-a の管理に近い性質だと思う。こちらで扱えば評価がしやすいのではないか。例えば、「入場者の何%がダイナビジョンを見ている。」「知床五湖のレクチャーを受けている。」という比率が高ければそれだけ管理が行き届くということである。私の個人的なコメントである。

間野委員

長期モニタリングの変更については、去年の12月から1月にかけて意見を募っていたが、意見を述べずに申し訳ない。確認したいことがある。

1点目、基本的な枠組みに関しては理解できている。記憶では、去年の第1回会議の際に、「不適切な利用の頻度をどう評価するか。」ということを私から提案させていただいた。評価シート No.19a の(1)または(2)に該当するのではないかと考えている。具体的にどちらに位置づけるのかということ。

2点目、前回の会議でも発言したが、ヒグマの軋轢問題、適正管理の問題、不適切な問題の発生にどう対応していくのか。何もかもエコツーリズムWGがモニタリングするというのではなく、例えばエゾシカ・ヒグマWGで行っているモニタリング項目があれば、そういうものを引用して評価を行うという話があったのではないか。エゾシカ・ヒグマWGのモニタリングに「No.20 ヒグマによる人為的活動への被害状況」という項目があり、ヒグマによる人身被害の発生件数、危険事例の発生件数、人間側の問題行動の状況をモニタリングしている。そのデータを使用することを想定されているのかどうか。

敷田座長

2点質問があった。混乱するため1点目より順番に議論を進める。確かに前回第1回エコツーリズムWGの際に間野委員より「不適切な結果や知床エコツーリズム戦略に背くような利用の顛末は、必ず社会的に問題化するはずである。」という発言があった。これについては複雑なためその後議論が起きていた。明確な決着はついてなかったように思うが整理したい。

事務局 環境省 守

私も間野委員の発言にあった「不適切な利用」についてはモニタリング項目に入れたいと

思っていた。資料 1-2、4 ページ「No.19b 聞き取り調査用シート」の一番下の部分に、「③事業、ツアーで使用しているフィールドや地域の自然環境について、何か気になることや心配なことはありますか。」と聞き取る項目を設けている。ここで拾えるのではないか。また、その上②では、利用者や客層について自由記述してもらうようにしており、不適切な利用の状況を拾えるのではないか。

敷田座長

No.19-b で拾うということは管理上の懸念として拾うということである。不適切な利用があるという事実のカウントはNo.19-c の「利用」となるが、どちらかで集約した方が混乱が無いと思う。

愛甲委員

それは私も考えた。不適切な利用を数としてカウントするのは難しい。どうしても「こんなことを見た。」「こんなことをやっている人がいる。」と定性的にならざるを得ない可能性がある。拠点の利用者数を示しているNo.19-c では噛み合わないのではないか。

No.19-b でそういう要素を盛り込もうと②、③に客層の変化を含めて気になることを書いてもらうようにした。さらに、不適切な利用や観光客の行動などについて、②と③の質問を、もう少し具体的に書くのはどうか。現状書いてあるのはフィールドや自然環境について気になることを書いてもらうようになっている。不適切な利用や観光客の行動なども含めて書いてもらうようにすると、懸念される事例はたくさん集まるのではないか。

間野委員

例えば、アメリカの国立公園などでは取り締まった件数が指標化できると思う。しかし、日本では取り締まった数自体が非常に曖昧であり、なかなか明確にはできない。私のイメージとしては、知床財団、斜里町、羅臼町、森林管理局、環境省が、「去年も何度も注意してきた。」「これについては何回言っても聞かない。」「今日もまた行ってきたよ。」「あれは悪質なので警察へ通報した。」ということがあった場合にそれを数える。または、「これは今後増えたら困る。」「放っておくと増えそう。」というようなものをリスト化し、それをカウントして指標化するというようなことができないかと。

その範囲の中で見ると当然全体のコンサーンとなるものが増えているか、減っているかぐらいは分かると思う。或いはそれに対する効果が上がっているか、いないかということについても分かるのではないか。注意しても全く効果が無いということであれば、現状のやり方が限界であり別の方策を考える必要がある。また、根源原因の管理が上手くいっていないのではないかと様々に考えることができる。昔は無かったけど近頃はよくあるというトレンドについてのモニタリングである。「昔はエサやり問題であったが、近頃は夜中にライトで照らすのがトレンドだ。」というトレンドではない。

これはコンサーンとなるような国立公園や世界遺産内で望ましくない行動をするビジターやレジデンシャルが減っているという形を見せる必要があると思っている。

敷田座長

間野委員には前回会議でも管理コストの問題も提言をいただいている。

最終的にはNo.19-b とNo.19-c のどちらで扱うかということ。要するにインパクトのデータとして扱うか、管理の課題として扱うかを整理すれば良いのではないか。

また、愛甲委員の意見ではデータの性質からNo.19-c は極力数量データとして扱いたいという考え方になる。

愛甲委員

多分、これをすぐに行なえということになるとかなり大変である。経過措置という取扱にしてはどうか。

例えば、登山者のパトロールを定期的に行っているところではパトロールする人達が日報を書いている。その日報から、どれぐらい注意をしたか、危険な事例が発生したかという記録をしている事例がある。各機関でそういうものを作っていればできると思う。

間野委員の提案を極力取り入れるよう考えてみた。例えばNo.19-b 聞き取り調査用シートに、具体的な回数や困ったこと、注意したことの記録が残っていたとする。それを具体的に書いていただくよう関係機関にお願いして積み上げることで、いずれはNo.19-c の中にも盛り込めるような指標になっていくかもしれない。No.19-b において注視しなければならない事例が皆さんから共通して出てきた際には、それをモニタリング項目とするという考えもある。それを長期モニタリングの項目に入れるのか、短期的なものとしてエコツーリズム WG で取扱うのかをエコツーリズム WG で議論してはどうか。

間野委員

先程の補足である。私もこれをすぐに長期モニタリングの項目にするという考えではない。問題意識を持って、どういう形で指標化する必要があるのか、指標化することには意味があるということに関係者間で共通認識を持って調整をしていく。そのように段階的に始めても全く問題はない。問題意識を持って長期モニタリングや個別モニタリングのアクションを始めなければ、いつまで経っても「大事だよね。」「だけどどうして良いか分からないよね。」で終わってしまう。それではいけないということ。

敷田座長

恐らく整理ができるのではないかと思う。斜里町、羅臼町、知床財団、環境省等が日々の管理で現場に出ており、このような案件を扱う事が多いと思う。将来的にカウントできそうな懸念報告等を考えていただきたい。現状ではデータの扱いが非常に難しいためNo.19-b の

管理に関する懸念報告で扱うということかどうか。取りまとめの環境省はどうか。安田所長、守氏はどうか。(安田所長、守：はい。)

愛甲委員

そうすると変更しなければいけないところがある。資料 1-1 裏面の素案で、No.19-b の「想定されるデータの収集先」には環境省、林野庁、北海道が入っていない。

間野委員の意見では懸念されることを書いて頂く場合、アクティブレンジャーや GSS が観察したことも含むと考えられるため記載が必要である。

敷田座長

一度整理する。守氏、モニタリングの実施者の微調整を行うということで良いか。

事務局 環境省 守

実施者ではなく、想定されるデータ収集先である。

エコツアーリズム WG 事務局でモニタリングは実施し、「No.19-b の聞き取り調査シート」での聞き取り先については国の機関である環境省、林野庁、北海道も入れるよう修正する。

敷田座長

斜里町、羅臼町は修正を加えて良いか。

斜里町 増田

ヒグマに関する危険事例などの数は、ヒグマ連絡会議で取りまとめている。新たな作業をしなくても、その数字をそのまま利用できるものもある。

敷田座長

では、エゾシカ・ヒグマ WG の数字をデータとして扱う。

事務局 環境省 守

エゾシカ・ヒグマ WG のデータは、エゾシカ・ヒグマ WG で取り扱うのではなかったか。

敷田座長

管理面に入れるのは恐らくこちらではないかと思うが、それは整理した方が良い。

事務局 環境省 守

長期モニタリング評価シートに重複して入るのはどうかと思う。エゾシカ・ヒグマ WG で入れるのであればエコツアーリズム WG では入れない。評価項目での評価はエコツアーリズム WG

では行わない。あくまでもエコツアーリズム WG で把握できるレベルの部分、「管理の評価」、「影響の評価」、「利用者数のモニタリング」ということ。全体的に共生、両立ができていくかというところは他の WG の結果も併せて行っていく。

敷田座長

間野委員、増田委員はよろしいか。エゾシカ・ヒグマ WG からのデータを参照すれば良いということ。羅臼町はどうか。

一つ前の話題に戻る。現場データは可能なものを数値化していくということ。

再度確認する。No.19-b は管理の項目である。No.19-c は利用の項目であり、性質の違いを前提として整理したい。また、他の WG から結果の出る数値については、全体で調整するという。重ねて挙げないという原則もここで確認しておく。

1点修正をお願いします。No.19-b 評価シートの「評価指標」に「自然環境に対する懸念」とあるが、ここを「管理上の懸念」に修正してほしい。後で誤解を生む可能性がある。管理上起きている懸念を書いてもらいたい。内容的に自然環境への懸念になるかもしれないが、あくまでNo.19-b は管理の項目である。No.19-a とNo.19-b は管理の項目、No.19-c は利用の項目である。自然環境への懸念というのは、他の WG より植生や環境へのダメージとして挙げてくるはずである。そちらでモニタリングをしてもらうということ。

間野委員

本日はエコツアーリズム WG での長期モニタリングの項目の整理ということだが、科学委員会全体で統括している有効な指標について、必要なものは共有してきちんと評価してほしい。それらの枠組みや指標の位置付けについても分かるようにしておいてほしい。本日の議題でも、あくまでも個別のことしか書かれていない。科学委員会に提案してほしい。

敷田座長

承知した。それは重要な点である。科学委員会に対してもエコツアーリズム検討会議でのモニタリングの枠組みについて、参考資料 4 の図も含めて文書化されて残っていくとはっきりする。

敷田座長

ポイントは適正利用・エコツアーリズム検討会議では「利用の強度」と「管理の徹底度」、この2つを担当してモニタリングをするということ。

最終的な評価は、利用の結果起きた影響のデータも見ながら評価するという方針を持つということが良いか。例えば、利用度は上がっても、管理が強化されていれば環境の影響は恐らく無いだろう。しかし、植生の後退などがあった場合には、管理が弱いか利用度を上げ過ぎているということであり、警告を発するという考え方を取っていく。

これまで単純に利用だけを見て多い、少ないと言っていたのを、利用の結果起きた原因を同時にモニタリングしていくということである。次元が増えて科学的なモニタリングに一步近づいたと考えて良い。良いか、悪いかではなく、何故良いかという議論ができるように1段階上がると考えてほしい。ある意味画期的なことである。恐らく他では例が無いため試行錯誤が続くと思う。良いか、悪いかというような個人の価値観に基づく議論を越えていける。「こういう根拠があるのにこういう変化が起きているのはどこがおかしいところがあるのではないか。」「管理を強化して利用も増えていないのに植生が後退している。これはたぶん自然環境自体の影響なのではないか。」というような議論ができる。理想的になる。これ以降は良し悪しの議論を離れてロジカルな議論に移っていきたい。

愛甲委員

エコツーリズム WG で評価を行うのが何処までなのかということと、科学委員会で何処まで評価するのかという整理がついていない。前回の科学委員会、エコツーリズム検討会議でもそういう発言をした。

エコツーリズム WG で評価を行うのは、No.19-a、No.19-b、No.19-c のモニタリング項目に書いてある適正利用に向けた管理と取組みである。適正な利用、エコツーリズムの推進、利用者数の変化ということであり、「VII. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境の保全が両立されていること。」というのは、科学委員会で評価すべきことだと思う。

利用者数、懸念される事項などをエコツーリズム WG で担当し、他の WG から挙げたデータと付き合わせた結果、この「VII. レクリエーション利用等の人為的活動と自然環境の保全が両立されていること。」をどう評価するかということは科学委員会で議論すると思っていたがその理解でよいか。

事務局 環境省 安田所長

現状、個別のモニタリング項目に関する評価は行っているが、評価項目の評価は行っていない。愛甲委員の発言のように、生態系の評価等の8つの評価項目自体について、科学委員会で評価できないか議論したいと思っている。

敷田座長

科学委員会には私と愛甲委員が参加している。利用、管理、それによって起こる影響を組み合わせた評価というのは科学委員会でもこれまで手掛けてこなかった。科学委員会では主に自然環境の影響、要するに結果の部分だけを見て原因やそのプロセスを見ない評価をしてきた。科学委員会でもまだ経験の無い領域だと思うため多少時間をかけても良いと思っている。

科学委員会は管理に関する専門家ではない。皆さんの担っている日々の仕事は、管理という重要な要素が入っており、管理の努力を評価していきたいという個人的な考えもある。そ

して、利用圧が上がっていないかも見たい。その結果としての影響は全体としては見てもらいたい。

しかし、科学委員会にリクエストしても、当面の間はどう考えているのかと話がここへ戻ってくると思う。そのため皆さんには引き続き議論をしていただくことになると思う。以上が私の個人的意見も含めた見解である。

間野委員

私は科学委員会の委員ではないが、エゾシカ・ヒグマ WG とエコツーリズム WG の委員を務めている。両方の WG に所属している立場から言わせていただく。

エコツーリズム WG において、適正利用を行う上で軋轢や管理のコストを減らして行く議論がされていないとエゾシカ・ヒグマ WG では思っている。

エゾシカ・ヒグマ WG では、軋轢や人身事故のリスクを無くすためのあるべき姿を探るべきだという話はしているが、非常に密接な関連のあるアクティビティについて意思疎通がされていると思えない。

我々は、エコツーリズム検討会議の内容だけでは、どういう管理を行ったためにこういう軋轢になったということについて知る機会がない。そうすると結局その結果がどうなったのかを理解しないままでいてしまう。両方の会議に出席してそう感じている。

敷田座長の発言のように、科学委員会に言ったとしても時間も無いし無理だと言われそうである。難しいかもしれないが、拡大して話し合う場が持てれば、お互いが活性化するのではないかという気がしている。

敷田座長

間野委員の意見は非常に重要である。科学委員会では議論の時間も限られている。モニタリング結果を議論する WG のようなものがあれば理想的だと思う。しかし、環境省の仕事を増やすことになるため将来的な課題ということにしたい。折角専門家がいるため、この結果を元にモニタリングの総合評価を議論できる場はあった方が良い。愛甲委員、来週の科学委員会で発言をお願いできるか。

中川委員

ダイナビジョンは入れるのか、落とすのか。

敷田座長

ダイナビジョンの利用者数は管理に入れるのか、利用に入れるのかということだが、個人的には管理だという考えである。

愛甲委員

中川委員の発言に関して私の考えを言う。

道の駅などの直接環境に影響をしないような利用者数は減らして少しシンプルにするという考えでダイナビジョンは除外した。自然センターの利用者数が入っているためダイナビジョンの利用者数は含まれるという考え方もある。確かに中川委員の発言にあったような側面もある。また、映像も入れ替わるという話もあるため、利用者数や利用の流れが変わる可能性もある。ダイナビジョンは復活させても良いかと思う。

もう一つ、滞留時間については計測したデータが今は無い。しかし、私が行っている知床五湖のアンケートなどでは聞いている場合もあるため、整理すれば出せるかもしれない。

資料 1-1、2 ページのNo.19a 評価シートでは、「(8)観光客の評価やニーズ、行動特性の変化がモニタリングされているか。」という項目があり、ここにアンケートを実施したかを書くところがある。ここに大きな行動の変化や新たに取ったデータを詳しく書き込むようにすれば、中川委員の意見にあったことも含めることができる。将来、長期モニタリングの項目としても挙げる必要があるとなった場合にはNo.19-cに取り上げることができると思う。

No.19-b についてである。「No.19b 聞き取り調査用シート」の「②利用者数、客層の状況についてお伺いします。」というところに「行動」も入れて、観光客の行動に気になる変化が現れてないかどうかを関係機関等、事業者を含めて書いてもらう。それにより観光客の行動の変化についての情報は拾えるのではないか。

敷田座長

守氏、愛甲委員の発言で整理されたと思うがどうか。

事務局 環境省 守

愛甲委員の意見を受けると、No.19-c ではダイナビジョン利用者を今後もモニタリングしていく。利用という側面で見えていくということ。そして、管理に入れたるべき時期が来た場合、項目の変更になると理解した。

No.19-b では、間野委員の指摘を踏まえて、②と③の聞き方について文言の変更を行う。客層と行動とを入れるということ。回数としてカウントできるような不適切な利用があった場合は書いてもらえるように文言を変更し、まずは定性的なところで把握していく。いずれそれが指標とできるかを検討していくということが良いか。

事務局 環境省 山本

ダイナビジョンの利用者数を入れることには反対である。自然センターの利用者数で見ることができる。ダイナビジョンを入れてしまうと世界自然センターでの映像回数や遺産センターでのツアー客に対するレクチャー回数など、あらゆるものが含まれてくる。さらに夜ホテルで解説しているということも含まれてしまう。際限がなくなるためあくまでも自然センターの利用者数に留めておくのが良いのではないか。

敷田座長

非常に妥当な説明だが関連した意見はあるか。

私の個人的な意見である。先程から繰り返しているように、今回の整理では「管理」は管理のための努力のことである。これには例えば普及啓発も含まれるという観点があると思う。そこから考えるとレクチャー回数やレクチャーを受けた割合というのは、むしろ管理の努力に入れておけば良いのではないか。

No.19-c についてはあくまでも直接自然環境にインパクトが予想されるもの、因果関係がシンプルなものという整理をしてはどうか。つまり施設利用についてはNo.19-c には入れないということ。施設というと遊歩道、高架橋みたいなものは実際には施設であるが、あれもほぼインパクトはゼロであり本来は無視しても良い。しかし、一帯として管理しているため今回は入れるという整理ができると思う。

No.19-b については、レクチャーの頻度や回数、レクチャー率のようなものとしてカウントができるのであれば検討して入れていくということではどうか。あくまでも普及啓発、管理の一部と見るとそれだけの努力はしているということ。

No.19-c は直接の踏みつけやインパクトが説明できるもの。これについても非常にグレーな部分はあるが一応成り立つのではないか。現場を見ている増田氏はどうか。

斜里町 増田

知床自然センターでは、映像の数や滞留時間もデータとして測っている。それをどう扱うかは委員の皆さんの意見で決めていただけて結構である。

敷田座長

滞留時間は重要であるが、どう扱うかという判断は今の時点ではできない。取りあえず保留として良いか。

事務局 環境省 守

はい。

中川委員

滞留時間は平均の滞在時間が分かれば入館者数で分かると思う。サンプル調査のような形だと思うが、知床自然センターではそうしているのか。そうすると各施設でも可能ではないか。

斜里町 増田

それは営業上重要なデータとして、何人か抽出して取っているものである。

敷田座長

データ化できるという話と「管理」と「利用」のどちらに分類されるかというのは性質が違う整理である。

データ化はできるということだが、それを管理の要素と見るのか環境に影響がある利用の要素とみるのかということ。それを決めることで答えは出る。皆さん何か良い知恵はあるか。

私は管理の要素に入れるのが良いと思う。滞留時間が長ければそこで環境学習の強度が上がっていると想定をすることができる。

関連した施設として、国立公園、遺産エリア内にある自然センター、ビジターセンター、エリア外にある遺産センター、道の駅、ホテルを一緒に扱うべきではないという気がする。国立公園内の施設建設は、保護、保全に繋がる施設という目的で設置された。その機能を果たしているかどうかというのとは大きな違いがある。

エコツーリズム戦略では、世界遺産区域や国立公園区域にかかわらず影響がある部分は全て扱うということになっている。そのため一帯として含めて良いのではないか。

事務局 環境省 守

「管理」か「利用」という話は付いたが、来週の科学委員会までにどうまとめるかという
と難しい。もう少し議論が必要ではないか。長期的な課題という理解で良いか。

敷田座長

承知した。科学委員会が来週に設定されおり、そこで報告する必要がある。今回は「管理」
に入れる。数値化ができているものについては次回から入れるということで良いか。滞留時
間数なども入れて良いのか。

事務局 環境省 守

何処にどう位置付けて入れるのか。

敷田座長

それは管理に入れる。

事務局 環境省 守

評価シートの管理なのか。

敷田座長

滞留時間も管理である。

事務局 環境省 守

評価シートNo.19-b で良いか。

敷田座長

No.19-b に入れる。場所は特に議論しなくても良いのでは。

事務局 環境省 守

来年から実際にデータを聞き取っていくことになるため決めておきたい。

敷田座長

No.19-c のシートと同じような表がNo.19-b にもできるということ。数値データが入るとのこと。

愛甲委員

No.19-b はそれぞれの管理に関する取組みや事業を行っている方々に聞くためのものである。コードを追加するということも考えられる。例えば、滞留時間やダイナビジョンの利用者数は、知床自然センターを運営する事業での一つの要素であるため、斜里町もしくは知床財団に事業名知床自然センターの運営として書いてもらうことになる。「ダイナビジョンの映像は今年どのぐらいの利用が伸びました。」「現在滞留時間はこのくらいになっています。」というように具体的なデータの提出が可能であれば書いてもらう。しかし、そういう数値が書けないところもある。現時点では②と③に気付いたところがあれば記入してくださいということになっているが、具体的なデータを持っているところには具体的な要素も書き込んでいただく工夫をすれば良い。

事務局 環境省 安田所長

最後に参考になる事項という形で欄を設け、そこに書けることを書いてもらうのはどうか。

敷田座長

はい。安田所長の整理で良いと思う。長期モニタリングのため、書いてもらうとなると継続して書いてもらう。途中でやめるのは駄目である。

守氏、細かい整理も含めてよろしいか。来週の科学委員会に向けては皆さんのここでの議論を反映、付記して説明をする。事務局より一括で説明してもらう。その結果についてはメーリングリストで共有する。私からも補足や発言はする。愛甲委員も出席するため責任を持って説明をしてきたい。議事1を終了して次の議事に進みたい。

中川委員

知床自然センターは、「自然を壊して施設を建設するのはどうなのか。」という全国的な批判がある中で作ったものである。それが知床の保全のための機能を果たしているかどうかのモニタリングは大事だという気持ちがある。

モニタリング施設に知床峠の駐車場は入っていない。以前から思っていたが、知床峠はエコツアーリズム検討会議でも話題になっていない。当初は現在の1/3程度の駐車場で、工事の資材置き場を利用して作った駐車帯であった。その後、利用が多くハイマツを壊して3倍程度に広げた。現在では1/3程度しか利用されていない。必要な施設として自然を壊して作ったものについては、きちんと機能しているかどうかのモニタリングも必要ではないか。駐車場の利用状況など利用が減少しているものについてもモニタリング対象にして良いのではないかと思う。これは私からの話題提供として将来的な課題として考えてもらって良い。必要ないのであれば拡大した駐車場部分（コンクリート部分）を自然復元して国有林に戻すという考えも将来的に必要ではないか。モニタリングにはそういう観点もあるのではないか。

敷田座長

中川委員の視点は重要であり、引き続き次回以降に議論を進めたい。それでは、小林委員が到着されたため2番目の議事に進めて良いか。

議事2 適正利用・エコツアーリズム検討会議部会への委員参加について事務局より説明をお願いします。この委員というのはWGの専門家と考えてほしい。私達常任委員の他、臨時委員の皆さんも対象になる。これは前回のロングトレイルの問題に付随して整理するものである。ロングトレイルだけに捉われず、今後の部会への委員参加について、助言者、支援者としての参加の基準を明確にしたい。

【議事2. 適正利用・エコツアーリズム検討会議部会への委員参加について】

事務局 環境省 守

適正利用・エコツアーリズム検討会議部会への委員参加について説明（資料2-1）

知床エコツアーリズム戦略等における専門家の位置づけ整理表について説明（資料2-2）

敷田座長

部会への専門家、ワーキンググループ委員の参加についてはエコツアーリズム戦略、事務取扱要領でも位置付けされている。これまでの参加実績もあるため基本的には参加していただくということ。行政関連で設置される部会は参加が無い、ほぼ全員が参加して助言している状態である。整理がつくと思うが小林委員から発言はあるか。

小林委員

これまでの整理内容と実際の運用を考えると、その辺が塩梅の付け所なのかなと言う気がする。本来はストリクトにやるべきだと思うが、事務局の勧める内容で運用されるという事である。現状から一定の線引きをすればカバーされる境界だと私は判断した。

敷田座長

小林委員がメーリングリストで表明された懸念は常につきまとう。エコツーリズム戦略でいう直接的な利害が関係しないということは明らかではないが、専門家が全く知床に関与しないというのは知床の専門家ではなくなるというような自己矛盾も起こす。そういう面があると考えいほしい。知床を全く知らない場合でも特定の事案、例えばリスクマネジメント等の分野において非常に詳しいので判断ができるという方はいらっしゃるはずである。そういう場合には完全に利害に関係しない方をお願いする場合もある。多様な場面が出てくると思う。最終的には専門家であるため参加したくないと言う自由は残されている。しかし、私達エコツーリズム WG メンバーは依頼があれば検討するという事でお願いしたい。専門家の数が少ない中で運営しているため協力いただきたい。以上の整理で良いか。間野委員いかがか。(間野委員：はい。) 愛甲委員よろしいか。(愛甲委員：はい。)

中川委員

資料の修正をお願いします。知床条例検討部会の担当委員が不在になっているが、私が参加しているため入れてほしい。

敷田座長

知床条例検討部会は中川委員に担当していただいていた。知床観音岩 COST WAY フットパスコース部会は暫定的に愛甲委員と私が務めてきた。この部会を小林委員に担当していただけるか。

小林委員

承知した。

敷田座長

参加の途中で利害が強烈に関係してくる場合には、その時点で辞退するという選択肢もある。皆さん以上の整理で良いか。部会設置担当の斜里町、羅臼町は、これを意識した上でお願いしたい。

なお、初期より費用負担の問題が懸案として残っている。これは答えが出ないため、それぞれの努力で当面お願いします。

議題3 その他、懇談会報告と議論である。時間はまだ20分以上ある。今後の方針を含めて少し大きい議論もした方が良いか。

【議事 3. その他】

知床エコツーリズム戦略 事務取扱要領

事務局 環境省 守

知床エコツーリズム戦略事務取扱要領について説明（参考資料 6）

敷田座長

北海道運輸局からの話題提供、アドベンチャートラベルから順番にお願いします。

このエコツーリズム WG では管理の話題が非常に多いが、実際の現場のリクエストには振興というものもある。それを意識した管理が進められるのが望ましいということから、振興に関係がある観光庁の北海道運輸局から出席いただいている。今回より正式な構成員となり、関連して北海道観光部局より佐々木氏にも出席いただいている。北海道庁は自然環境と観光の両方の担当に来ていただくことになる。

アドベンチャートラベルは今後展開するであろう旅行形態である。現在はエコツーリズム推進計画からエコツーリズム戦略に切り替わっているが、振興・推進部分が非常に手薄になっている。これは自然環境をどんどん使えという話ではなく、健全な振興をするという観点からも非常に重要になっている。また、この 10 年の変化としてインバウンド観光の増加という利用圧がかかっており、将来的にこれを適切にコントロールするためにも振興計画は避けて通れない。座長としての個人的見解である。この点を含めて、非常に重要な説明になると思う。北海道運輸局より説明をお願いします。

【議事 3. その他】

北海道観光を変える Adventure Travel

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

北海道運輸局出先の釧路運輸支局の山崎です。よろしくお願ひします。本来であれば札幌観光部の者がこちらに来るべきだが、本日は私から説明する。

北海道観光を変える Adventure Travel について説明（参考資料 7）

敷田座長

説明内容について質問、コメントはあるか。いきなりアドベンチャートラベルの話になり戸惑いがあるかもしれない。現実にはこういうスタイルのツアーが入り始めている。こういう客層が入ってきているため、先取りした対応が必要だという観点からである。全面的にこれをやりますというような話ではない。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

補足したい。こういう旅行者が旅行先として選ぶのは、環境保全に取り組んでいる、環境に配慮している場所ということである。彼らに選ばれる為には、それが大前提だということを付け加えさせていただく。

斜里町 増田

市町村でもアドベンチャートラベルの話は色々聞いている。ひとつまた新たなジャンルの旅行形態が生まれる中で市町村の立場からは是非お願いしたいことがある。観光分野と環境分野という分野の違いはあると思うが、環境省、林野庁などの国の機関同士の横の連携を取ってほしい。国の機関が別々に動くのではなく、世界遺産や国立公園でどう受入れるかという部分も横の連携を取って話をしてもらいたい。

敷田座長

増田氏の意見はもっともである。官公庁は税収も得て元気になってきている。こちらに投資をしていただくことも寛容かと思う。

事務局 環境省 安田所長

阿寒摩周国立公園では満喫プロジェクトを進めているが、その中でアドベンチャートラベルを取組方針の一つとしてしっかり位置付けている。それは阿寒摩周に限った話ではなく、道東の3公園は少なくとも連携していく必要があると思っている。北海道運輸局と話をしながら進めていきたい。また、ATTA やプロモーションなどにも環境省が参加しているため、十分に情報交換しながら進めていきたい。

斜里町 増田

是非連携していただきたい。受け入れには色々な仕組みや制度が整っていないといけない。アドベンチャートラベルは自然に対して負荷をかけずに楽しむということが前提だと思う。しかし、着地後の体制は整っていない部分もあると思う。これを機会にそういう受入れ側の制度や体制も整える必要があるのではないか。

中川委員

体制が整っていないということに関連して発言する。資料の最初のページ、野生動物観察の写真にヒグマが使われている。色々議論もあり、現状ではヒグマは観察対象としての体制が整っていないため誤解を招いても困る。パンフレットなどに使われる場合は、他の動物の写真が良いのではないか。

敷田座長

中川委員から発言では知床としてヒグマをどう扱うのかということ。前回の検討会議で

大きな話題になった事である。アドベンチャートラベルの話が終了後、残りの時間を使って意見交換をしたい。

アドベンチャートラベルという言葉自体はまだ馴染みが少ないと思う。こういう客層のエンターテイメント中心の利用が今後増加するという予想がインバウンドの増加と共に成り立つ。こういう利用も含めた新しいタイプのエコツアーについて、対応する振興計画や取扱い方向というようなものを先取りしてまとめていきたい。観光庁で中心となって進めていただけるとありがたい。環境省は自然環境保全が中心であり、得意な方面で分担していただくとありがたい。それぞれ色々な分野を担当しており、正式に構成員となったため、その役割をお願いできないか。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

北海道運輸局としては北海道全体のアドベンチャートラベルマーケティング戦略というようなものを作っていきたいと考えている。環境省とも相談しながら戦略に活かしていきたい。

敷田座長

そこまでお考えであれば、知床は世界遺産であるため特例扱いをしていただき、地域版のようなものを考えていただけると良い。全ての予算を持ってきて何かを作れということではなく、こういう枠組みの中で考えていただけると非常に嬉しい。帰って相談していただきたい。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

帰って相談する。

敷田座長

北海道庁も今回より参加されている。地域という視点では北海道庁も大きく関わってくる。北海道庁と北海道運輸局は本拠が両方札幌にある。できればそこを中心に動かしていただくと非常にありがたい。皆さんの関心が向くと思う。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

戻って本局と相談したい。

敷田座長

可能であれば次回のエコツーリズム検討会議よりそういう検討の場をスタートさせていただきたい。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

承知した。

敷田座長

来週の科学委員会の際に私が直接お訪ねする。調整させてほしい。よろしくお願いします。

北海道運輸局釧路運輸支局 山崎

承知した。

敷田座長

他に関連してあるか。今の案件は今後重要な役割を担っていくと思う。我々の自然環境の管理にとっても大きな影響がある。消費リーダーとして色々な観光客を引っ張ることにもなり、体質を変える可能性もある。重要なこととして認識の上議論に参加してほしい。

北海道庁観光局も連携を取っていただくようよろしくお願いします。

議事3. その他(2)は事務的な報告であるため後回しにして進めて良いか。

議事3. その他(1)は、前回の検討会議の際にヒグマの資源化、ヒグマをどう扱っていくのかということが大きな話題になった。それを含めて議論したい。

【議事3. その他】

(1) 知床国立公園利用のあり方に関する懇談会について

事務局 環境省 守

ヒグマの話題はエコツアーリズム検討会議で発議されたため、午後より詳しく説明いただく。懇談会ではこれから利用の制度をどうまとめていくか、分かりやすくしていくかということも関連してくるため、そういう議論も可能である。

知床国立公園利用のあり方に関する懇談会 これまでの経過と今後の予定について説明
(資料3-1)

敷田座長

説明に関連して発言はあるか。

斜里町 増田

懇談会は自由な議論の場ということだったと思う。色々なエリア毎の話をした。最終的に2月19日の会議では、色々な意味で先端部の利用を進める上では、しっかりした制度やルールが必要だという話になった。羅臼町からは先端部のトレッキングについて安全管理の面でも利用調整地区制度の適応が必要だという話が出た。制度と具体的な利用調整地区制

度の話は最初から話していたことであった。町役場側だけではなく羅臼町の町民からの発言だったと思う。羅臼町では地域としても利用調整地区制度の賛成の意見が多数だったと思う。安全対策は速やかに進めるべきという意見はあったと思う。しかし、記述にあるような「制度はどれでも良い。」というような意見はあったか。

事務局 環境省 守

佐々木泰幹氏からの発言で、制度はどれでも良いので速やかに安全対策をして欲しいという意見があったと記憶している。

斜里町 増田

承知した。しかし、多くの参加者からは地域にとっては馴染みのある利用調整地区制度のようなものという賛同の意見があったと理解している。

羅臼町 遠嶋

私は最後の懇談会に出席していなかった。首長からの意見が過去からあり、羅臼町としての意見、利用調整地区制度も含めた国立公園利用のサービスの一環として考えてほしいと述べた。昆布番屋が何十件と建ち並んでいた時代にはルールがあり、昆布漁師が行くのをやめさせることや、判断の選択肢を与えることなどができた。

現在はそういうことはほぼ皆無である。事故の起きそうなところに昆布漁業者はいない。今まで止めてくれていたところはもう無い。もうルールだけでは太刀打ちできないというのが現場の感覚である。昆布漁師からは、「あんな時にどうしてあんな所に行かせるのか。」「どうして強制的に止めなかったんだ。」と言われるが、こちらとしては止めるすべが無い。自己責任という話になる。「命の問題だろう。」と良く言われる。しかし、ルールではもう対応できない時代になった。利用できる制度があるのであれば、しっかり取組む方向で考えていただきたい。危険箇所の最上位として利用調整地区制度を真剣にお願いしたく、首長とも調整して意見を述べた。

敷田座長

他に意見、コメントはあるか。小林委員は懇談会に出席されていたのか。

小林委員

偶然知床にいたため会議を聞いた。非常に実質的な議論がなされており、有効な会議であったという印象を受けた。会議終了後に少し気になっていることがある。会議の前半に遅れてしまったため、モニタリング評価について議論に参加できなかった。私共のエコツアーゾムのモニタリング評価の中に抜けていることがあるのではないかという気がした。

サービスと言う言葉がよく出る。中川委員から知床自然センターの話があった。環境教育

の教育という意味のサービスについて個々のケースでは出てきていた。外国人インバウンドを呼ぶにしても情報の出し方という議論はされているが、利用者に対する教育とサービスをどのようにしていくかも議論が必要なのではないか。

ヒグマの問題もそうであるが、多くの利用者や地域住民に教育という面での情報のコンセンサスを作り、中身のコンテンツをどのように共有していったら良いか。それをどのように伝えていくのかということのをこれまで大きな議題として議論してこなかった。

利用と保全という2つの大きな柱が環境省にはあり、その2つの軋轢部分を調整していく必要がある。知床の望ましい観光利用を推進して行くにはきちんと議論する必要がある。

例えば、先端部地区には先端部利用のためのフィールドハウスがあるが、教育についてはそれ程大きく出せていない気がする。環境教育を含めて、その場所でどういうレクチャーを受けるのか。レクチャーではどういう教育サービスをするのか。教育サービスのあり方をどうシステムで作るのかなどは十分に議論していなかったような気がする。昆布漁師が居た時には、昆布漁師が「今日は危ないから行くなよ。」と言ってくれた。でも今はそういう人は居ない。そういう情報、その場所の安全性や危険性を含めた情報を伝える。これも教育だと思う。ヒグマ問題、海難、水難、動物とのリスクマネジメントを含めて教育という観点もサービス機能の中に必要ではないか。外部の人に情報を教育と言ったら高飛車過ぎて良くないのかもしれないが、ガイド、地域の方を含めた議論が必要である。

敷田座長

環境教育については先程も話題になっていたが、啓蒙啓発を含めて重要な項目だと思う。

利用調整地区の議論、エコツーリズム推進法の活用と色々な議論はある。私からの意見だが、基本的にはそれを活用するのは手段だと考えている。手段の後にどこへ到達するかという共通の像を持つておくことが必要だと思う。手段は共有しているが到着点は違うというのは1番混乱を招く。手段を推奨していただくことは町としても重要な手続きの関係上あると思う。どのような知床半島にしたいのか、どのような世界遺産地域、国立公園にしたいのかをもう一度議論をしてから並行してやっていただけないか。

斜里町 増田

制度の話、使い方の議論はこの懇談会でされている。海岸トレッキングで実際に今回事故があったが、亡くなった方はフィールドハウスでレクチャーを受けられた方であった。死亡事故は2例ともそうである。「行かない方が良いですよ。」と言ったにもかかわらず事故に遭った。結果的に拘束力が無いため行ってしまいうようなこともある。

利用者に安全で快適に利用していただくためにも、規制ではなくしっかりとした制度があるというのが地域としての結論である。方法論としては利用調整地区制度、エコツーリズム推進法などがあるが、できるだけしっかりした国の制度が良いというのが地域としての意見であった。

敷田座長

恐らくどういう姿にしたいのかというのは共有できてないと思う。私が共有しているのは、エコツーリズム戦略の基本原則の3つで、管理計画にはそれが明確に書かれていない。管理計画の改定をするという話はあるが、現時点で頼りになるのは皆さんが合意したエコツーリズム戦略の基本原則である。「遺産地域の自然環境保全とその価値向上」、「世界の観光客への知床らしい良質な自然体験の提供」、「持続可能な地域社会と経済の構築」である。しかし、これは原則として非常に曖昧であり、具体的にどのような知床世界遺産地域するかという像を共有してから手続きが必要ではないか。

人命に関わることであり緊急的にやらなければいけない。そういう議論をしている場合ではないというのであれば、切り離すという選択肢はある。しかし、それは別の話になる。人命が理由であれば、ここでの議論ではなく地元自治体、国、行政の責任においてやられるべきで、ここで議論をする内容を待ってられないのではないかというのが私の意見である。

斜里町 増田

人命部分は切り離しても、地域でのイメージの共有ができてないと座長は言われた。座長から見るとそうかもしれないが、この懇談会も含めて進んでいると私は思っている。全く進んでいないということではないかと思う。

敷田座長

全然進んでいないのか、それが見えていないことで共有ができていないのか。例えば、私はこのレベルでしか共有できていないため、先端部に人を入れることを判断する基準がこれしかない。私はその時にどう考えるかと言うと、「良質な自然を体験できるのであれば、先端部は人が入る場所として優れているのではないか。」ということである。そのため、それを共有して具体的にこういう利用を促進する。こういう場所はこういう利用を促進するというプランができて、その次に必要であれば場所を分けるゾーニング。そして、それの手段の設計、実施というのが妥当な流れだと思う。

斜里町 増田

この懇談会を踏まえて、今後のスケジュールにあるようにエコツーリズム戦略、利用の心得等の内容の更新及び再編に向けての議論を深めていければ地域も了解する。

敷田座長

エコツーリズム戦略の原則の具体化や改定は、環境省、林野庁も考えていると思う。また、本来上位の管理計画で持っていて欲しい判断基準に近いもの、知床の理想像のようなもの

を明確化、共有化するというプロセスがどうしても必要になってくると思う。実施した方が良いと思うが、そうしない限りはその手段について喧嘩ばかりすることになる。それは越えていきたい。

斜里町 増田

その通りである。

敷田座長

はい。

事務局 環境省 守

増田氏の意見の通り、具体的な記載や共有は再編の議論でみていくと事務局でも考えていた。来年度以降、検討に入ると思う。

敷田座長

増田氏の発言はもっともであり、来年度から再検討のプロセスに入ってもらいたい。あり方懇談会では十分議論をしてきたという前提である。

斜里町 増田

今の段階では、十分議論したと言える。

敷田座長

十分議論したということであり、それを受けてエコツーリズム戦略、管理計画の改定の準備をするということ。具体的なステップをするということ。それにより大きな流れができてくる。皆様のご不満は個々の細かい点では残ると思うが、共有できる部分を最大化した上で最適な手段の設計をする。そのため時間は掛かかるが1番軋轢が少ない。将来的な発展、可能性を考えると、そのアプローチが良いと個人的には思う。

人命の件については放っておいたというような言い訳は効かない。それは別件だと思うが、それに捉われて将来の大きな果実を見失うのは我々専門家としては納得のいかないところである。

委員の皆様はどうか。理想像の共有もぼんやりしており、具体的にエコツーリズム戦略と管理計画の改定が良いと思う。管理計画の改定では、エコツーリズム戦略の基本原則のようなものを管理計画に盛り込んでいただくということ。何かあれば管理計画を尊重して判断していくということになる。この場は専門家との意見交換の場であり、決定の場ではない。今決めるという話ではない。ここは行政的な判断も入ると思うが林野庁を含めてどうか。

事務局 環境省 安田所長

スケジュールとしてはこういう予定で。(マイクオフ)

敷田座長

私の言うスケジュールというのは具体的な改定のことである。懇談会での議論は十分という意見があり、委員を含めて皆さんも恐らく同じ意見ではないか。改定のプロセスを具体的に進めてオープンにしてほしい。あり方懇談会を組み替えて具体的に改定していただくことになる。

事務局 環境省 安田所長

まずは行政だけの話と考えている。行政の立場も色々ある。まずは方向性を議論した上で、最終的にはこの場で議論する事になると思う。まずはどこで、どのように合意が取れるかを議論したい。

敷田座長

地元の 2 町と北海道庁が良いと言うのであれば構わない。我々はあくまでも専門家の立場であり決定する立場ではない。しかし、基本的にこのような議論はオープンにした方が良いというのがエコツアー戦略のこれまでの考え方である。決まったことを実施するということにならなければ良い。

事務局 環境省 守

エコツアー戦略を軸にした具体的な書き込みやルールの再編に向けた議論は、まずは行政機関で進めさせていただく。皆さんからの意見を受けて再編を行っていく。できた案は地域の皆さんに意見を聞く機会を設けて進めていくというような手順で考えていた。

敷田座長

行政というのは国ということか。

事務局 環境省 守

いいえ。斜里町、羅臼町、北海道、林野庁、北海道運輸局も含める。

敷田座長

管理者プラス地元市町村ということか。

事務局 環境省 守

そうである。

敷田座長

承知した。委員の皆様からコメントはあるか。

愛甲委員

懇談会に出席していないための外れなことを言うかもしれない。先端部の問題についてこのまま置いておいて良いのだろうか。知床エコツーリズム戦略、管理計画の改定の検討は今後何年かかけてやっていくと思う。懇談会では、こういうことをするべきだという意見、手段についての意見、色々な意見が出たという話であった。現行の利用の心得を含めて具体的な話を進めずに置いておいて良いのか。知床エコツーリズム戦略全体の見直しは良いが、その間それを放置しておいて良いのだろうか。

敷田座長

重要な問題であれば切り離して並行処理をしても良いと思う。それはその部分が全体に影響を与えるという前提でやることになる。

間野委員

知床エコツーリズム戦略や管理計画の見直しをした際に、これまで懇談会で議論されたことが反映されていなければ、これまでの議論が時間の無駄になる。出てきた問題について現行の制度の中で実現できるものはしつつ、今すぐできないのであれば次の計画の改定や知床エコツーリズム戦略の見直しに合わせて実現するというのを念頭に置いた設計にしてほしい。この懇談会で問題が出てきている訳であり、「制度上無理なので反映しません。」「時間的に間に合わないから先送りします。」ということでは私は納得できない。私は知床管理計画にこれまで20年ぐらい関わってきている。今回の先端部地区利用の心得についても、早い段階から関わっているが、その都度殆ど改善されてないという理解でいる。

関係機関の非常にアンステーブルな合意、紳士協定の中で運用されているというように理解している。そのことに対する運用の限界というのが地元の羅臼町や斜里町からの話で出てきている。今回の懇談会の切実な要望である。愛甲委員が言うように、同時並行で最終的に損はないところに落ち着かせるような検討をすべきだと思う。そのために我々ができることは最大限協力するというのが私のスタンスである。

敷田座長

恐らくもう少し議論した方が良いと思う。午後の会議の準備もあるため中途半端になるが一旦これでまとめた。

安田所長の発言にあったようにエコツーリズム戦略等の改定は、行政、管理者、地元市町村で1度方向性をまとめるということである。次回のエコツーリズムWGに今後の改定計画

を示してほしい。安田所長よろしいか。

事務局 環境省 安田所長

次回ではなく1年後である。

敷田座長

1年後ということである。それでは1年かけてその改定の枠組みを作っていていただき、その次の年から実際に改定作業に入る。人命に関わること、非常に重要だと共有できたことについては、手段を含めて個別に対応する。ただし、その手段の選択が全体に負荷逆的な影響を与える場合には先送りするというところでよろしいか。手段で制約をされてしまって理想が実現できないというのはおかしい話である。そのため、手段ではなく最終目的地を何処にするのかをしっかりと共有した上で、それに適する手段を選ぶということ。手段の議論は一旦凍結していただく。先に行政で枠組みを作ってもらい、目的地をどのようにするかという改定の手順を示す。それに従って手段を選んでいく。特別な事項については例外的に先に手段を選択する場合もあり得るということ。人命に関わること以外には無いと思う。安田所長よろしいか。

事務局 環境省 安田所長

はい。

敷田座長

林野庁はいかがか。(林野庁：はい。)私の進行が悪く30分オーバーしてしまった。午後の会議が控えているため一旦これで議論を終了したい。会議終了後の雑談や意見交換も時間が許す限りしていただきたい。補足だが、意見交換されたことについてはメーリングリストで共有するというところで良いか。

事務局 環境省 守

承知した。

敷田座長

山本氏よろしいか。くれぐれも手段に固執されること無く、理想像に向かっていただきたい。一旦閉会したい。

事務局 環境省 高辻

これをもちまして平成30年度第2回知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用・エコツアーリズムワーキンググループを終了させていただく。皆様ありがとうございました。

(閉会)